

テンプス

2013年（平成25年）50号



孝恩寺松瀬青々句碑

も く じ

俳人松瀬青々（せいせい）と貝塚

孝恩寺の仏像 - 如来④ 阿弥陀如来2 -

古文書をひも解く
ため池から公園へ

古文書講座

『貝塚市の70年』刊行



木造弥勒菩薩坐像

俳人松瀬青々（せいせい）と貝塚

貝塚市教育委員会では、平成4年度に貝塚市郷土資料展示室特別展『俳人松瀬青々と貝塚千古吟社（ちこぎんしゃ）』を開催しました。この特別展では、大阪を代表する俳人松瀬青々と貝塚で誕生した俳句結社「千古吟社」の作品を取り上げ、貝塚における先人の文芸活動の一端を紹介しました。今回のテンプスでは、その特別展から20年余りが過ぎたこともあり、貝塚の地を愛した大阪生まれの俳人、松瀬青々について改めて取り上げたいと思います。

松瀬青々について

青々（写真右下）は、本名を弥三郎といい、1869年（明治2年）、大阪大川町（現在の大阪府中央区北浜、写真右）で生まれました。生家は薪炭商を営んでいましたが、家業には全く関心を示さない読書好きの子どもでした。小学校を卒業すると、商いのかたわら読書や学問を続け、次第に文学の世界に没頭していきました。

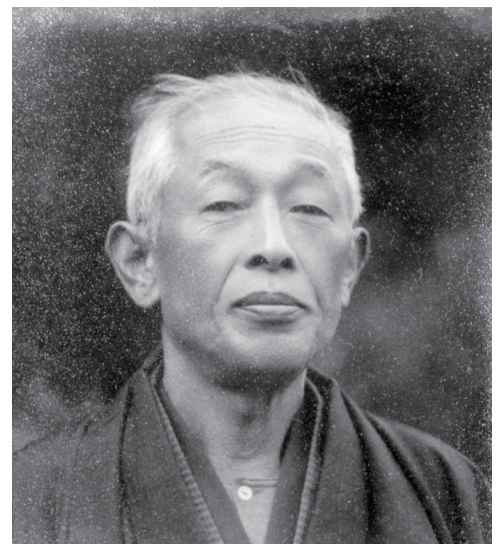
1895年（明治28年）、第一銀行大阪支店に入行した頃から俳句を学び始めました。1897年（明治30年）には、高浜虚子選の『ほととぎす』、正岡子規選の新聞『日本』の俳句欄に青々の句が相次いで掲載され、翌1898年（明治31年）には子規に「大阪に青々あり」と賞讃されました。1899年（明治32年）、虚子の依頼で『ほととぎす』の編集を務めるために上京しますが、翌年には東京の生活になじめないなどの理由で大阪にもどります。

大阪に帰って間もなく、大阪朝日新聞社に入社し、俳句欄の選者を担当しました。また、1901年（明治34年）、俳誌『宝船』（のちに『倦鳥』（けんちょう）と改題）を刊行し、没年の1937年（昭和12年）までこれを主宰しました。

その生涯を作句活動に捧げた青々は、大阪を中心に広くその足跡を残し、明治以後の関西俳壇の基礎を築きました。



大阪市史跡顕彰碑「松瀬青々生誕地」



松瀬青々

松瀬青々と貝塚

青々は、9歳の時に生母と死別し、ほどなく迎えられた継母でいに育てられました。継母でいは旧姓を水間ていといい、その祖先が松尾芭蕉（ばしょう）と同時代の元禄の俳人水間沾徳（せんとく）であったことから、青々は貝塚水間の地に強い関心を持つことになります。

青々が貝塚を初めて訪れたのは1922年（大正11年）3月17日のことで、岸和田在住の門人森古泉（こせん）らとともに木積（こつみ）と水間の地を吟行（ぎんこう）しました。木積では釘無堂（国宝孝恩寺観音堂）に安置された国宝（現在は重要文化財）の仏像群、水間では水間寺の本尊や宝物類を拝観し、境内にあるお夏清十郎をまつる愛染堂や縁結びの椿を見、お夏の生家でその子孫と語り合いました。この時詠んだ俳句は次のようなものです。

弥勒仏（みろくぶつ）の 下生（げしょう）をいつと

轉（さえず）れり

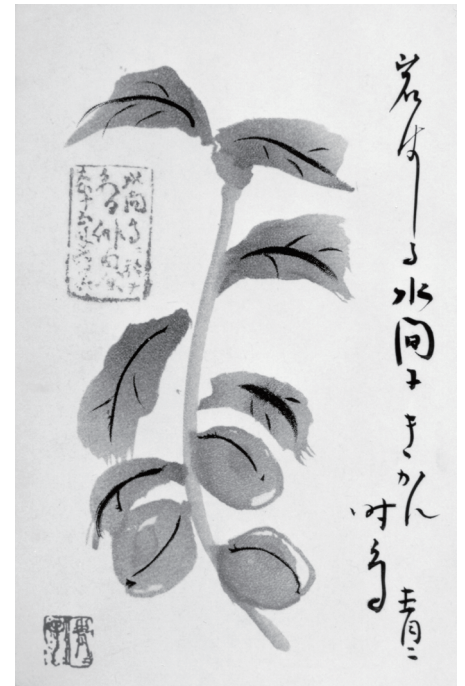
ほのかなる 日暮の中の 連翹花（れんぎょうげ）

搔松葉（かきまつば）の 門にもの問ふ 夕霞

寺をいでゝ 梅の残りに 歩きけり

黄昏（たそがれ）や きのふの雨の 落梅花（らくばいか）

涅槃（ねはん）過ぎの 寒さを訪（と）ひつ 水間寺



絵葉書「岩はしる 水間にきかん
時鳥（ほととぎす） 青々」

翌18日付の青々が古泉に宛てた書簡には、木積、水間の地について「又ゆるゆる遊覧いたし度（たき）ものと思ひ候、実によろしき山村の趣、只ならず興を引かれ申候（そうろう）」としたためています。

そして、この手紙の通り、木積、水間の地には、その後初詣、初午（はつうま）詣、七夕祭り、蛍狩り、俳句大会の開催など何度も訪れています。また、近義（こぎ）の浦（二色の浜）の防風（ぼうふう、セリ科の多年草）や月見草を好んだほか、王子の吉祥園寺や三ツ松の梅林（写真右）などへも吟行しています。とりわけ1927年（昭和2年）に青々が高師浜に新居を移して以降は、青々に師事した貝塚の俳句結社「千古吟社」の同人たちとともに、四季折々の貝塚を楽しんだことが知られています。



1931年（昭和6年）2月22日三ツ松梅見句会

防風の 卯月しろみや 浜千鳥（1926年、近義の浦吟行）

山の眉に 夏来にけりな 櫛の宮（1926年、近義の浦吟行）

菜の花に 荒れて吉祥 園寺かな（1927年、吉祥園寺吟行）

初午の より道をしつ 雨上り（1927年、水間寺初午詣）

御旅所の 組みかけてあり 浜すゞみ（1929年、感田神社貝塚宮）

凍て鳥の 羽の木にのこり 梅の花（1931年、三ツ松梅林吟行）

夏草の 辻に面着て 猿田彦（さるたひこ）（1931 年、感田神社貝塚宮）
提灯と 月の浜辺に 踊りけり（1931 年、貝塚その他の盆踊り）
水間川 流の中の 青薄（すすき）（1932 年、和泉倦鳥俳句大会）
二ツ三ツ 蛍とばせて 寝入る家（1935 年、水間蛍狩り）

孝恩寺境内の青々句碑

現在、木積の孝恩寺境内に建つ青々の句碑は、1937 年（昭和 12 年）の青々死去から 3 年後の 1940 年（昭和 15 年）に建てられたものです。この句碑は、貝塚「千古吟社」の同人たちの青々への追慕の念を、当時の貝塚町と町民団体「水間保勝会（ほしょうかい）」が後押しする形で建設されました。この句碑に刻すべき句について、千古吟社同人から選定依頼を受けた森古泉は、木積、水間を詠んだ数多くの句のなかから、孝恩寺の弥勒菩薩坐像をうたった「弥勒仏の 下生をいつと 轉れり」を選びました。この句は、先にも紹介したように、青々が初めて当地を訪れた時に詠んだ句であるとともに、青々がこの句を作ったのは「此（この）優秀な木彫弥勒仏坐像を拝観され、さては木積わたりの眺めに天平の名残をも思はるゝ景趣、特に清浄な釘無堂境域を歩かれて啼鳥（ていちょう、鳥の鳴き声）や水音を耳にせられて、彼の未来仏たる弥勒仏の下生（神仏がこの世に現れること）に対する至高なる思慕」からであろうと古泉が判断したからでした。



1940 年 11 月 3 日孝恩寺青々句碑建碑式



孝恩寺青々句碑を囲んでの記念写真

古泉は、この句碑建設にあたって、「釘無堂と青々先生とのゆかりも古いものであるが此句碑に依つて更にぴつたりとなつた。又いつからか千古吟社の発意であつた、先生の句碑建設が実現した喜びは、独り吟社の四君のみでは無い、此碑の清浄至高なる句に依つて倦鳥俳句道の神髓に触れしめつゝ、世上多くの作句者を正しき俳句道に導くべき先生の芸術の偉大さは、蓋（けだ）し計り知られぬ深さである事を更におおいなる悦びとすべきである。」と、青々俳句の継承を願い、俳誌『倦鳥』に掲載された前掲の文章を閉じています。

俳句は、四季おりおりの自然の美しさや、それによって引き起こされる情感を、五・七・五の十七音にまとめた一種の定型詩です。青々が詠んだ多くの俳句には、大正時代から昭和初期にかけての今はなき郷土貝塚の美しく懐かしい情景やその時々的情感があふれています。紙幅の都合でそれら全てを紹介することはできませんが、また別の機会にそれらを紹介できればと思っています。

孝恩寺の仏像 - 如来④ 阿弥陀如来 2 -

貝塚市木積(こつみ)の孝恩寺には、平安時代の制作で地方色豊かな 19 軀(く)の仏像が安置されており、うち 18 軀が重要文化財に指定されています。今回は、テンプス第 46 号で紹介した立像(りゅうぞう、立っている姿の像)に引き続き、阿弥陀如来の坐像(ざぞう)を紹介します。

【重要文化財】木造 阿弥陀如来坐像 1 軀

時 代 平安時代後期

像 高 138.8cm

指定年月日 1938(昭和13)年8月26日

本像は、もとは十一面観音像であった伝観音、伝勢至(せいし)の両像を左右に配して阿弥陀三尊として安置されています。

半丈六(はんじょうろく)という大きさに作られた阿弥陀如来像で、衲衣(のうえ)とよばれる衣を偏袒右肩(へんたんうけん)に着して、両手は腹前で弥陀定印(みだじょういん)＝上品上生印(じょうぼんじょうしょういん)という印を結び、右足を前に結跏趺坐(けっかふざ)しています。

製作技法は寄木造(よせぎづくり)で、後世にほどこされた漆箔(しっぽく)のために詳しい構造は不明ですが、頭部は3～4材製、体部は両肩先、膝前、衣の裳(も)先などは別材製と思われます。

丸顔で起伏の少ない面部に小さめの眼・鼻・口を配して、穏やかながら繊細な感覚が見られます。体部も起伏が少ないですが、衣文(えもん)にはやや自由の風がうかがえ、制作は平安時代後期11～12世紀ごろと思われます。



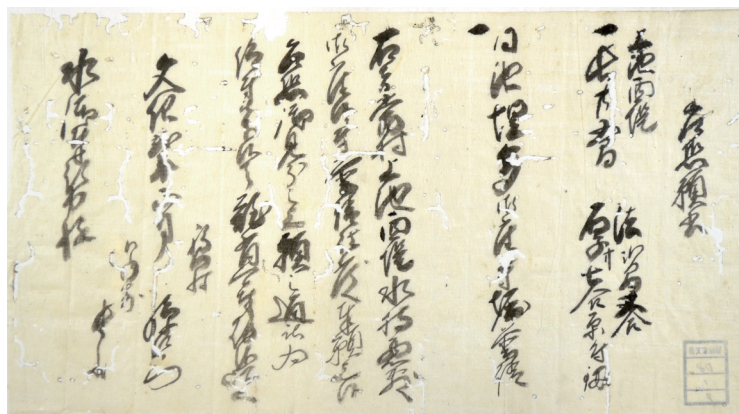
<用語解説>

- ・半丈六：仏像の高さの基準で、立像は八尺(約2.4メートル)、坐像は四尺(約1.2メートル)のものを指す。
- ・衲衣：如来が身にまとう衣のこと。
- ・偏袒右肩：右肩をあらわにする着衣の形。
- ・弥陀定印：両手とも掌を上にして合わせ、両手の第二指を立て、残りの四指の指先を互いに接するという阿弥陀如来坐像のみにみられる手の組み方。
- ・結跏趺坐：足の甲で左右それぞれ反対側のももを押さえる形の座り方。
- ・漆箔：仏像彫刻などで漆(うるし)を塗った上に金箔を押したもの。
- ・衣文：彫刻などにおいて人物などの体に動きによって生じる衣服の線のこと。

古文書をひも解く

◆ため池から公園へ

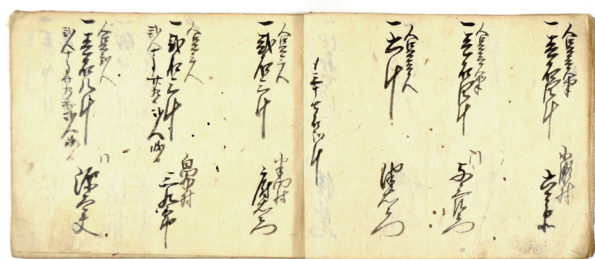
泉州にはかつて農業をおこなっていくための水を得るために、たくさんのため池がありました。江戸時代には、これらのため池は池の水を利用する村々がお金を出し合い、維持管理に努めていました。堤防の修築工事や池の拡張工事などは池普請（いけぶしん）といい、尾張者（おわりもの）と呼ばれる土木技術を持った集団が中心となって工事を進めました。



史料1 文化2年（1805年）福田村上池堤普請につき願書〈福原家文書〉

福田村（現在の貝塚市福田にあたる）が利用するため池として福田村上池（小池と呼ぶ）・福田村下池（現在の今池）がありました。そのうち上池については、文化2年正月に福田村の庄屋・年寄の連名で岸和田藩水奉行に提出した願書がのこされています。この史料によると、西側の堤防「廿五間」（約45.45 m）の補強と、土が入り込み浅くなった池を掘り下げる工事をおこないたいと願い出ていることがわかります【史料1】。

この工事は同じ年の秋10月、収穫を終え水が必要でなくなった時期を見計らい、水を抜いて着手されました。工事には多くの人びとが人足として加わりますが、その費用は上池の水を引いている田畑を持つ人たちで分担しました【史料2】。



史料2 文化2年福田村上池掘普請人足帳〈福原家文書〉

このように農業にとって欠かせない水を確保するため、村人たちがお金を出し合い大切に守り抜いてきた福田村上池ですが、農地が減少し水を以前ほど必要としなくなりました。

そのため、福田村上池は埋め立てられ、福田公園へと姿を変えています。



写真 埋め立てられた上池、現在の福田公園

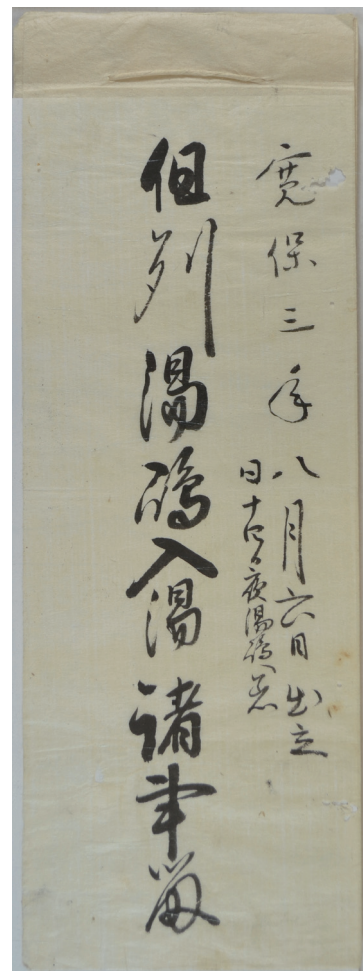
古文書講座

◆「江戸時代の湯治」

平成 25 年 6 月 12 日（水）から 5 回にわたり、「江戸時代の湯治」と題して古文書講座を開催しました。江戸時代、病氣療養などを目的におこなわれた湯治は、江戸時代には広く民衆にも普及しました。泉州を出発した人びとの湯治記録をもとに、その頃の様子をたどっていきました。

テキストである湯治記録は、この旅にかかった費用を書き留めたもので、旅の行程をほぼ復元できる内容でした。スタートは大坂からで、尾崎へは船で渡りました。日記ではないので、それらはすべてかかった費用として現れてきます。道中の休憩では茶代・昼食代、わらじの替えを買い、宿泊では木賃宿（きちんやど）代が記録されています。木賃宿での宿泊は、米を買って自炊するというスタイルを取ります。したがって米代も宿代とは別に計上されています。ご隠居さんの二人旅でしたので、荷物持ちの人を雇ったり、かごに乗ったりして、旅の負担を和らげていることも確認できました。旅の目的地は但州湯嶋（たんしゅうゆしま）、現在は城崎（きのさき）温泉の呼び名で有名です。ここで3週間の湯治生活を過ごしました。ちなみに旅のコースは同じ道をたどらないのが一般的で、大坂から兵庫、明石、高砂へと西に向かった後、北上して和田山、養父（やぶ）、湯嶋へと入りました。帰り道は丹後宮津へ東に進み、福知山、亀山（現在の亀岡）、京の手前の愛宕山（あたごやま）でお参りを済ませ、伏見、そして再び大坂へと帰って来るものでした。

講座の参加者からは、「昔の旅が身近に感ぜられて楽しかった」「江戸時代の物見遊山（ものみゆさん）の様子が少し理解できたと思う」「地名など知っている所が多く面白い」といった感想が寄せられました。



「但州湯嶋入湯諸事留」
(要家文書)

□古文書講座（第42回）開催のお知らせ

テ ー マ：江戸時代のため池と池普請

日 時：第1回 平成25年11月13日、第2回 11月20日、第3回 11月27日
第4回 12月4日、第5回 12月11日

いずれも水曜日午後2時～4時30分

会 場：貝塚市民図書館2階視聴覚室

資料代：100円

申 込：住所、氏名、電話番号を明記の上、はがき・Eメール・FAX、電話いずれかで、
下記まで事前にお申込みください。

連絡先 〒597-8585 貝塚市畠中1丁目12-1（貝塚市民図書館2階）貝塚市郷土資料室

TEL 072 (433) 7205 / FAX 072 (433) 7107

E mail shiryoushitsu@city.kaizuka.lg.jp

『貝塚市の 70 年』刊行

平成 25 年 5 月の市制施行 70 年を記念し、カラー写真・図表を取り入れた貝塚の歴史を解き明かす本を作成しました。

価 格：3,000 円（500 部限定）

A 4 版、総 302 ページ

販売場所：社会教育課（貝塚市教育庁舎 1 階）

郷土資料室（貝塚市民図書館 2 階）



ブラジル大会での経験から、長身の外国選手との戦いの困難さを痛感した大松は、対ソ連戦に備えた秘策として「回転レシーブ」を考案し、猛練習を行うようになった。一九六一年、チェコのプラハで開催された三大陸選手権大会への参加は、世界一を目標にすえた日紡貝塚の試金石となった。この時の欧州遠征は日紡貝塚の単独チームによるもので、日紡チームは大会に優勝したのみならず、大会不参加のソ連との親善試合を含めて 22 戦全勝という快挙をなし遂げた。この遠征中、ソ連の新聞記者が日紡チームを評した「東洋の魔女」という言葉は、その後、日紡貝塚の異名となった。

しかし日紡貝塚が目標としていたのは、・・・。

『貝塚市の 70 年』第 3 章 12 節より抜粋
「東洋の魔女」と東京オリンピック

かいづか文化財だよりテンプス 50 号

平成 25 年 8 月 30 日発行

貝塚市教育委員会

〒 597-8585 貝塚市畠中 1 丁目 17-1

Tel (072) 433-7126 Fax (072) 433-7107

Email: shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

印刷：(株)帯谷印刷所

※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。

年 4 回発行：各 1,000 部

印刷単価： 41.58 円

広告募集中

50mm × 80mm（最終ページ） 1 枠

50mm × 175mm（2～7 ページ） 6 枠

詳しくは社会教育課文化財担当までお問合せください。

